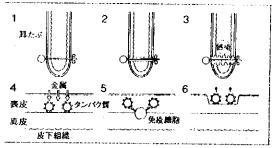


❖Ⅳ-5-3| 金属アレルギーの起こりかた(ピアス)

1.ピアスをすると金属が皮膚をつきぬけ身体内部に入ります。
2.金属は体液とふれあいもしつつ溶け出します。
3.普通は1か月程すると穴の内部に皮膚が作られ金属の溶け出しは止まります。しかし細菌が入るとなかが化膿して皮膚ができない状態が続きます。
4.こうなるとさらに多くの量の金属が溶け出します。溶け出した金属は身体の中のタンパク質と結合します。
5.すると身体の中の免疫細胞が金属と結合したタンパク質を外敵としていっせいに攻撃を始めます。
6.免疫細胞に攻撃されるとタンパク質は破壊されその部分の細胞は死んでしまいます。その結果皮膚に炎症が起き激しいかゆみに悩まされるなどアレルギー症状がおこります。

5 金属アレルギー

金属アレルギーを一言でいうと

普段身に着けている金属(ジュエリー)や日用品に使われている金属が,汗や体液でわずかながら溶けて,イオン化した金属が体内に入り,次に同じ金属が接触すると拒絶反応を起こし,皮膚がかぶれる状態(アレルギー性接触皮膚炎)をいいます(Ⅳ-5-1,2)。

▶Ⅳ-5-1,2| アレルギー性接触皮膚炎

金属アレルギーはどのようにして起こるのか

一番起こりやすい状態は,ピアスを初めて着けるときです。指輪は表皮の厚い指にしますので,金属は表皮に阻まれ,体内に入りにくいのですが,ピアスは皮膚を貫いて皮下組織に直接金属が接するため,拒絶反応を起こしやすいのです。(Ⅳ-5-3)はピアスを例にとって説明したものです。

金属アレルギー自体は治療できない

身体に異物が認識され,次回の侵入を防ぐために記憶されることを感作といいます。一度感作されると,金属アレルギーは一生といってよいくらい長い間持続し,金属アレルギー自体は治療することができません。

皮膚には本来あってはならない物質の侵入を拒否し,また細菌が入ってこない免疫反応を起こさせる働きがあります。そこで感作されるときわめて少量の原因物質(アレルギーを起こす金属)と接触するたびに皮膚炎を起こします。通常は6~48時間の間に反応しますが,時には数日後ということもあります。

金属アレルギーを引き起こす要因は

金属アレルギーは,誰でもかかるというわけではありません。身に着けた金属と着けている人の条件でかかります。まず金属ですが溶け出しやすい金属かどうかということです。

ニッケルやコバルトなどの,低品度とされる金属ほど起こしやすいとされています。着けている人の条件では,まずその金属に触れる頻度があります。最初の接触により感作が起こる場合もありますが,何回も接触を繰り返しているうちに,例えば数十年間にわたって感作されることもあります。次にその金属に触れる条件があります。例えば汗をかくことの多い夏に身に着ければ,発症しやすくなります。これは汗は酸性で,金属は酸に弱いため,金属が溶けるからです。この点からいえば,冬は皮膚炎になりにくく,金属アレルギーと汗の密接な関係を知ることができます。その他着ける人の体質,例えば汗をかきやすい人かきにくい人,角質層の厚い人薄い人とさまざまな要因が組み合わさって,アレルギーが引き起こされます。

アレルギーの原因となる金属

私たちが日常接する金属製品の数はきわめて多く,1種類の金属だけで作られているものははとんど見当たりません。家庭用品の多くは色合いをよくし,耐腐食性をもたせるために,メッキという形で多種金属の表面加工がされています。またジュエリーであっても純金属そのままのものは少なく,多くは合金を用い,あるいはその上にメッキ加工を行なっています。

どんな金属でもアレルギーを起こす可能性をもっています。どの金属が起こしやすいか(Ⅳ-5-4)をご覧下さい。

❖Ⅳ-5-4| 金属アレルギーと起こしやすい金属

アレルギーを起こしやすい ↑	ニッケル/コバルト/クロム
	亜鉛/マンガン/銅
	銀/プラチナ/金
	チタン

❖ニッケル

女性のアレルギー性接触皮膚炎の原因の第一位です。汗の中の塩素イオンはニッケルを溶かす作用が強く,過去にニッケル・アレルギーにかかった人は少量の汗でもニッケルを身に着けただけで皮膚炎を起こします。またニッケルが使われている50円玉,100円玉,500円玉(Ⅳ-5-5)などに触れる機会の多い人も,アレルギーを起こすことがあります。さらにこの金属は接触した部分だけでなく,血液に運ばれて汗の多い場所に湿疹を出すこともあります。

アクセサリーには金メッキ仕上げが行なわれることが多く,これらの下地にはニッケル・メッキがよく利用されています。金メッキが傷ついたり摩耗した場合は下地に使用したニッケルが溶け出す場合もあります。

❖コバルト

ニッケルと近縁関係にある金属でニッケルと同じ反応をしめします。

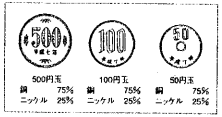
❖クロム

時計の皮バンドやゴルフの革手袋で,アレルギー皮膚炎を起こす場合があります。これは皮製品をなめす過程で6価クロムを用いることがあり,ニッケル皮膚炎と同様に汗の多い部分や特別にそれと摩擦の多い部分に限って,湿疹を出すことがあります。

❖金

金は溶けにくい金属です。ですから指輪やネックレスのように,普通に皮膚に接触するくらいではアレルギーは起こりにくいのです。しかし最近のピアスの流行で金による皮膚炎が増加しつつあります。ピアスは皮膚に穴をあけるため,金と皮下組織が直接接触し,体液にさらされる条件がそろっているからです。

❖Ⅳ-5-5| 硬貨に含まれるニッケル



金属アレルギーにならない方法

1.アレルギーを疑われる人は身に着けない

医者でどの金属が自分にとってかぶれるかパッチテスト(金,銀,プラチナなどの金属溶液をつけた絆創膏を皮膚にはって状態を見る)を行なえば,そのかぶれる金属を使わないことで防ぐことができます。

2.ピアスは不衛生な環境でしない

最初のピアスは生傷の状態なので清潔さを保つことが重要です。しかし清潔を消毒と間違え,消毒し過ぎ(とくにアルコールなどの強い消毒液)でかぶれてしまい,さらに悪化させてしまうケースも多いようです。

3.ピアス素材の選択に気をつける

金,プラチナ,銀もなりにくい金属ですが,チタンがいちばん安全との結果がでています。またピアス・ポストの長さも重要です。耳たぶの厚い人が軸ストの短かいもの(耳に入っている部分の長さが6mmのもの)を着けていると,耳たぶを常に圧迫し,アレルギーを引きおこす原因をつくります。

【コラム】ジュエリーの文化的背景Ⅰ

「天皇家のコレクションはやはりすごい」正倉院のジュエリー

❖Ⅰ-1| らでんの鏡
反対側が鏡の表になるので,使うときはこの中央のつまみ(ちゅう柱)にひもを通し,それらをもって使いました。直径27cm。

正倉院(しょうそういん)くらい,大人の玉手箱,いや人類の玉手箱という言葉がぴったりのものはありません。

この実感は,まず正倉院に保存されている数々の品物のすばらしさを直接見て,その後,実際の正倉院の建物を見ると,ことさら胸にせまってくるものがあります。

よくもまあ,これだけの品々が,木造の建物で約1000年以上の戦火をくぐりぬけてきたもの,奇跡に近いとうなずかされてしまいます。

第二次大戦で,米国はあえて奈良や京都を爆撃しなかったという話ですが,よくぞそうしてくれたものだと思います。

さて,その正倉院の御物(ぎょぶつ)を見てみましょう。

その初めに,(Ⅰ-1)の螺鈿(らでん)の鏡をとりあげてみます。

当然のことながら,古代,中世には今使われているガラスの鏡は存在せず,みな金属製(主に銅と錫)でした。そして磨き上げた鏡面は常時,こちらに向けているのではなく,かならず伏せて置くようにしていました。鏡にある種の魔性がひそんでいると思われていたのです。そしてまた,自己を映す特別な道具として,その存在は今の鏡とは比べものにならないほど,重要でした。

天皇家の三種の神器が剣と玉と鏡であることを思えば,もうそれ以上に,鏡の重要性について言うことはないでしょう。

鏡が金属製であること,常時は伏せて,つまり背面を表にして,しまったり,置いたりしたこと,そして何よりも,その存在の重要性から,鏡の背面はとくに念入りに装飾がほどこされています。

笑い話になってしまいますが,私などは,初めて鏡の写真を見たとき,これが顔を映す表だと思い,どうやって映していたのだろう,何か特別なしかけがあるのかなと真剣に考えてしまいました。どんな本にも「これらの写真は背面で,表は磨き上げられた平面で,そこに顔を映します」とは書いてなかったものですから。